

事例紹介1 NPO法人ふらっとスペース金剛の取り組みについて

岡本 聡子 NPO法人 ふらっとスペース金剛 代表理事

2003年、南海沿線の金剛駅（富田林市）の近くに古い民家を借りて、親子のひろばを始めました。約10人の仲間には、子育て中のママや妊婦さんだけでなく、子どもを育て上げた年代の人もいました。世の中では、子育てがしんどいと言にくい雰囲気があるので、安心して愚痴を言える場、自分の居場所が欲しい。「ふらっとスペース」という名前は、ふらっと立ち寄れる場所、対等な関係でいられる場所でありたいという思いを込めています。

深く考えずに始めてしまったのですが、家賃や水光熱費が要ります。お互いの子どもの接し方を見て、こういうことが子育て支援になるのではないかと思ったのですが、お金がないから続けられない。自分の子どもをほったらかしにして活動しているつらさや、民家を借りて始めたので、近所との関係なしに続けられないという課題が出てきました。

こういう課題を解決するために初めて市役所に相談に行ったら、最初は「はあ？」という感じだったのですが、何度も熱い思いを語りに行き、言いたいことは書面にするとか、成果は数字で示すとか、やり方を教わっていきました。私たちだけではできないことはわかっていたので、行政と折り合いをつけながら、私たちの思いもわかってもらいました。

私たちの活動は、最初からこれをしようと思って始めたわけではなく、勝手に広がってきたことも多いのです。最初は、ほっとくつろぐ場所が欲しかったのですが、いろんな人がかかわり、学生や近所の人がかかわってくる中で、30分でいいから双子を置いて買い物に行きたいとか、ニーズも変わってきて、それを何とかしようという人たちが預かり保育を始めました。地域の学生ボランティアは、「子どもわくわく体験隊」で、小学生、中学生と、学園や校区を超えて、家庭や学校ではなかなかできない体験をしています。

2005年、富田林市つどいの広場事業を受託し、「ほっとひろば」に生まれ変わりました。市役所の職員は、どうやって責任を持って公の事業を担うかを本当に根気強く教えてくれました。「ひろば」を始めるときにこだわった3つのポイントは、①土日・祝日もあけたい、②昼食を一緒に食べたい、③講座だけでなく、ゆったりくつろげる場所を提供することも子育て支援だということです。何もしないことに価値があることを認めてほしい。それを上手にクリアする知恵を行政にいただいたことが、ありがたかったと思います。

でも、ある職員から、NPOはアメーバが増殖しているみたいで気持ち悪いと言われたことがあります。大事なことを核に広がっているのですが、何でもかんでもやっているように見えるということで、私たちの中でも整理していかなければと思うきっかけでした。

「ひろば」が遠くて行けないという声が大きくなり、スタッフが出向いて子育てのお手伝いをする「一緒に子育てヘルパー」と、「出張ほっとひろば」を始めました。出張した先は、社会福祉協議会のコミュニティセンター、商工会が運営する市民会館、文化事業財団のホールです。使われていない場所があったら教えてくださいと言っておくと、地域の